

第1回 「国譲りと天孫降臨」

- ・出雲の国譲り
- ・常陸国と高天原
- ・天孫降臨の地、鹿児島

出典：「日本の起源は日高見国にあった」（田中英道著 勉誠出版）
「高天原は関東にあった」（田中英道著 勉誠出版）
「神武天皇の真実」（田中英道、扶桑社）
「古事記」（竹田恒泰 学研）、「日本書紀」（宇治谷孟 講談社）

I. 出雲の国譲り

1. 武御雷神(タケミカヅチノカミ)に関する記述

一大文化圏として栄えた高天原と出雲を一体化させる努力をしたのが武御雷神である。

参資1-1

(1) 出雲の国譲りでの記紀の記述

① 日本書紀での国譲りでの記述

* 武御雷神:「高御産巣日神は、皇孫を降らせこの地を治めようと思っておられる。

お前の心はどうか。お譲りするか、否か」⇒大国主命は「二人の息子に相談して決める」と伝える。

* 大国主命:二人の息子が屈服した後、武御雷神と経津主神(ツヌシノカミ)に対して、「私が頼みとした子はもういません。私も身を引きましょう。もし、私が抵抗したら、国内の諸神もきっと同じように戦うでしょう。いま私がこうして隠れましたら、誰もあえて戦わないでしょう。……」そう言って、国を従える時に使った広矛(ひろほこ)を二神に渡して、「この矛は国を治める時に功労のあった矛です。もし天孫がこの矛を使って国を治めるならば、からず国が穏やかに幸せな国になるでしょう。」⇒武力では簡単に負けはしないが、高天原の大きな力を恐れて国譲りをした。

* 武御雷神と経津主神の報告を受け、高御産巣日命は回答を伝えさせる。

「あなたの言うことは本当にその通りと思う。…あなたが住むことを希望している天日隅宮(あめのひすみのみや:出雲大社のこと)は、いま造りはじめましょう。それは千尋藻の長い繩を使って百八十の紐に結び、その宮を造る規模は、柱を高く太く、板は広く厚く作りましょう。また備える食物を作り、鳥のように早く走る船も作り、高天原に通うための天安河にも内橋をかけましょう。…」「あなたをまつる宮への奉仕は天穗日命(あまのほひのみこと)というもの視させます。」

* 大国主命:「天神の言われたことは、非常に行き届いていて、もう何も言うことはありません。…」

そして、久那斗神(岐神:クナドノカミ、道しるべの神)を二神に推薦し、

「この岐神が私に代わって、あなた方に従い、国々をご案内するでしょう。」

⇒ 久那斗神は息栖(いきす)神社の祭神になった。

(2) 武御雷神と経津主神による葦原中国の平定 (日本書紀)

二神は久那斗神の案内で、さまざまな者を諫めるが、香香背神(カガセオノカミ)のみが残る。

① 経津主大神の葦原中国の平定

- ・久那斗神の案内で方々をめぐり歩き、従わない者は切り殺し、帰順するものには褒美を与えた。
- ・この時に帰順した首長には大物主神と事代主神があり、そこで八十万神を天高市(あまのたけち)に集め、この神々を率いて天に昇ってその誠の心を披露された。⇒出雲とそれ以外の多くの国も併せて葦原中国。

② 「常陸国風土記」の信太郡(しだぐん)の記事には、

- * 「これより西の高来(たかく)の里は、老人のいうのには、天地の始まってまもなくのころで、さまざまな者がはこびっていたときに、天から降りてきた普都(ふつ)の大神が葦原中国を巡り歩いて、山や河べりに住む荒くれ者を平らげられた」
- * 常陸の国は葦原中国と記述し、普都の大神が記述される。
⇒葦原中国を平定し、常陸国を創り普都の大神が香取神社に祭られたことになる。

③ 香香背神(カガセオノカミ)の討伐 (書記)

- * 武御雷神は鹿島から約70kmの大甕(おおみか:日立市)に住む香香背神の悪神を建葉槌神(タケハツチノカミ)に命じ討伐する。
⇒二神は出雲国と他の国々からなる葦原中国を回って平定した。

2. 高天原への出雲の服従

(1) 国譲りの意味

* 国譲りとは

- ・「出雲政権を樹立させた西日本の勢力」を「日高見国をまとめあげていた東日本の伝統的な勢力、つまり高天原の勢力」が抑えて政権を統一したということである。
- ・国譲りでは、高御産巣日神は武御雷神(タケミカヅチノカミ)に天乃鳥船神(アマノトリフネノカミ)を随行させて出雲へ派遣する。(古事記)
書紀では、武御雷神と経津主神を派遣する。

①国譲りの背景(つづき)

*大陸の事情

- ・紀元前10世紀ごろの弥生時代初期は、帰化人の増大と水稻栽培の普及により、西日本の人口増加があった。
- ・大陸では、紀元前11世紀に成立した周王朝が紀元前8世紀に崩れ、春秋戦国時代へ。
- ・紀元前6世紀からの春秋戦国時代に続く戦国時代を紀元前221年「秦」の始皇帝が統一。
⇒大規模な統一国家の成立は周辺国家への脅威となる。
- 国家防衛を目的とした列島統一事業が必要とされた。

(2)出雲の服従

①荒神谷遺跡の銅劍

参資1-2

- * 荒神谷の銅劍埋蔵(358本)、加茂岩倉の銅鐸(39個)の意味は東国への恭順
 - ・「武器を捨てる」という「権力移譲」の意思表示であり、
 - ・「銅鐸を捨てる」という「權威を捨てる」ことは「国譲り」の儀式を表している。
- ⇒358本の銅劍は出雲の全神社による「剣を下げる」政治的デモンストレーションであった。
- * 荒神谷銅劍の根元に「x」の意味
 - ・荒神谷銅劍の根元に「x」が刻まれ、加茂岩倉(かもいわくら)遺跡の銅鐸の人間の顔に当たる部分に「x」が刻まれている。
- ⇒「x」の意味は、武器であれ祭器であれ、もう使わない、使えないものだという意思表示と解されている。

②高天原は強力な軍事力

参資1-3

* 建御方神との力比べ

- ・武御雷神が「信濃の国の諏訪の湖」の自分の勢力圏に追い詰め、降参させたこと。
- ・高天原政権の傘下に下った建御方神は降参の絶望を慰めるために諏訪大社に祭られた。
⇒建御方神との力比べとは、武御雷神との戦いで圧倒的な負けを記したのであろう。

* 鉄の優位性はなかったか？

③古代の鉄

参資1-4-①

* 湯鉄鉱の製鉄

- ・明神平(岩手県大槌町)では3600年前(紀元前1000年)のカキ殻の付着した鉄滓が出土している。
- ・諏訪地方、大阪府泉南市、滋賀県日野町別所などでの褐鉄鉱による製鉄遺跡
~~褐鉄鉱とは水辺の植物の根に鉄バクテリアの作用で水酸化鉄の殻を作る~~

諏訪大社古神事「湛え神事」

参資1-4-②

* 鹿島の鉄

- ・鹿島神社近くの厨台遺跡群(くりやだいいせきぐん)で、縄文中期の炉跡が発見される。
- ・紀元3世紀末(古墳時代前期初頭)の千葉県八千代市沖塚遺跡の工房跡から火窓(ほど)型炉跡(大鍛治と小鍛治のセットの工房)が検出された。各種鉄関連遺物と多量の砂鉄(2kg)が回収された。

* 鉄素材の渡来

参資1-4-③

- ・中国ではB.C5世紀に溶融製錬が実用化される。
- ・弥生時代に青銅器と鉄器がほぼ同時に流入しており、石器時代から青銅器時代を飛び越え鉄器時代に突入したと言われている。弥生中期(紀元前400年頃)。
- ・国内鍛冶は遅くとも3世紀には行われていた。(魏書倭人伝)
- ・3世紀末の韓鍛冶渡来
⇒大陸の製鉄技術開発から800年もの間、製鉄工人や製鉄技術の伝搬が無いのか？

II. 常陸国と高天原

1. 常陸国に関わる高天原の記述

参資1-5

(1) 高御産巣日神(タカムスビノカミ)

- ・記紀に登場する神。別天神、造化三神のうちの1柱である。
- ・「高見・産巣・日」と読むことができ、実に「日高見」の3文字が入っている。
- ・最初に天孫降臨の命を受けた天之忍穗耳命(アメノオシホミミノミコト)は高御産巣日神の娘、萬幡豊秋津師比売命(ヨロズハタアキツシヒメノミコト)との間に生まれた瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)を代わりに降臨させます。
⇒高御産巣日はアマテラスの直系に娘を嫁がせるほどの格を持った家柄であったと捉えることができる。高御産巣日は縄文弥生時代に日高見国、関東・東北をまとめ上げた日高見国の統治者と考えられる。

(2) 常陸国と高天原の関係

① 高天原を記述する風土記は『常陸国風土記』だけである

- ・写本として5つが現存し、『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』は一部欠損して残る。
- ・『常陸国風土記』の記述は、「八百万の神をお集めになったとき、祖先神(高御産巣日神)がおっしゃったことには、「今、わが御孫の命がお治めになろうとする豊葦原の瑞穂の国」とおっしゃった。高天原から下っておいでになった大神は香島(かしま、かぐしま)天の大神という。天においては日香島(ひのかしま)の宮と名付け、地においては豊香島の宮と名づける。……」
⇒鹿島が「高天原から降りられた神の住むところ」と認識されていた。

② 「伊勢国風土記」の逸文には、

- ・「天の方向に国があるから、その国を平定しなさい」と勅命をいただいた天日別命^注(アメノヒワケノミコト)が、征伐のしるしとして剣を授かって、東の方へ百里進んだ。…
(注)天御中主尊(アメノミナカヌシノミコト)の子孫。神武天皇の東征の際、伊勢(いせ)を平定し、統治したという。皇太神宮大神主の伊勢氏の祖。
⇒伊勢より「東」(東国)に「天」があることが認識されていたことになる。

2. 常陸国の神と神社

(1) 国譲りの神

* 古事記：武御雷神(タケミカヅチノカミ)と天乃鳥船神(アマノトリフネノカミ)

* 日本書紀：武御雷神と経津主神(ツヌシノカミ)

⇒この統一事業の立役者は鹿島神宮祭神の武御雷神であるが、古事記と日本書紀で随伴神が若干異なる。

これらの三神は東国3社と言われる鹿島神社と香取神社、そして息栖(いきす)神社(茨城県神栖市)に祭られている。

参資1-6

(2) 鹿島神宮

①鹿島神宮御祭神：「武甕槌大神(タケミカヅチノカミ)」

・「鹿島宮社例伝記」には、神武天皇元年に宮柱が立てられたとある。

神武天皇が檍原で即位したその年に、鹿島に使いを遣わして、大和入国を果たしたことを感謝し武御雷神を崇め、社を創設し祀った。

・古事記では、「国譲りの代償として、壮大な御殿を作る」ことを武御雷神が大国主命に約束する。そして、出雲大社は鹿島神宮と同じ祭神が横向きの形式の神殿が創られた。

参資1-7

参資1-8

②鹿島神宮の直刀(ちょくとう:国宝)

・この神剣は二振りあって、鹿島神宮にあるのは控えの剣とされ、武御雷神が授けたものは石上神社(いそのかみじんじゃ)の祭神になっている。

・箭靈劍(ツノミタマノツルギ)は全長2.7メートルを超える長大な神剣「直刀」

参資1-9

③鹿島神宮での12年に1度の聖代(せいたい)に「御船祭」が開催される

* 聖代とは、すぐれた天子の治める世のことをいう。

・「当社列伝」によれば、「天地も動くばかりにきこゆるは、あづまの宮の神いくさ、天下治めしことは古りぬれど、昔を見する神の御軍(みいくさ:皇軍のこと)」

・「天下治めしことは古りぬれど」とは、天孫降臨によって葦原中国を治らしめたことを表している。

(3) 香取神宮

- * 香取神宮の御祭神:「経津主大神(ツヌシノオオカミ)」
 - ・神武天皇十八年の創建と伝えられる。鹿島神宮と同様に、それ以前にも神子神孫(しんしんそん)が奉斎していたであろう。
 - ・経津主大神と武甕槌大神の二神は国譲りで共に出雲に派遣され、出雲と葦原中国を平定する。

(4) 息栖(いきす)神社

- * 息栖神社では久那斗神(クナドノカミ)を主神、天乃鳥船命(アメノトリフネノミコト)を相殿神として祀る
久那斗神は、道の分岐点で旅人の道中の安全をはかる神。
 - ・鹿島神・香取神による葦原中国平定において、東国への先導にあたった神という。
 - ・『日本書紀』の神話では、伊奘諾尊が黄泉の国で雷神に追いかけられたときに杖を投げ、「これ以上来るな(来など)」といったので、その杖をクナドノカミと名づけたとある。
- * 天乃鳥船神は、日本神話に登場する神であり、また、神が乗る船の名前である。
 - ・詳しくは鳥之石楠船神(トリノイワクスフネノカミ)と書き、鳥が飛ぶように早く、石のように固い楠材で作った船の神を表す。
 - ・香取神宮のある縄文遺跡・栗山河流域遺跡群から全長7.45mの楠木製の丸木舟が出土。同時代の比較では1.5倍から2倍の破格の大きさ。
- ⇒現在でも旅立つことを「鹿島立ち」と言い慣わすのはここからきている。

(5) 武御雷神と経津主神の役割

武御雷神は香取神社の経津主大神と共に東国の果てに鎮座される。

それは、東北の蝦夷からの守りと日高見国の鎮護にある。

参資1-10

- * 鹿島神宮は、御分社が東北に扇状に分布し、北から降る蝦夷に対する護り。
- * 香取神宮の御分社は下総を中心として、関東一円に点在し、祖神の国(日高見国)を守る使命。

3. 筑波山と高天原

筑波山の旧名は「二神山」あるいは「二上山」と呼ばれていた。

①常陸国風土記に、

古老曰く、

- ・崇神天皇の御世に、「筑波の地は「紀の国」と謂れ…、采女臣(ウメノオミ)^注の友属、筑築命(ツクハノミコト)を紀の国の国造に遣わしし時、自分の名をつけ筑波と称した」ことが記述される。
(注)采女の統括を担当した伴造氏族。采女とは、日本の朝廷において、天皇や皇后に近侍し、食事など身の回りの庶事を専門に行う女官のこと。

参資1-11

②筑波山神社は祭神を「筑波男神」、「筑波女神」とする

- ・「筑波山縁起」や南北朝時代の「詞林采葉抄(しりんさいようしょう)」では、
祭神を伊邪那美神・伊邪那岐神とする。
- ・筑波山はイザナギとイザナミの二神の山であるとの解釈が付く。

③香取神社が編纂した「香取群書集成」に収録された田植歌

- ・「あれみなさい、つくばの山のよこくも ホーイホイイヤアホイ よこくものしたこそ
わらかおやくに」と歌われている。
⇒筑波山の横雲の下(付近)をわれらの祖国(おやくに)と言っている。伊弉諾尊と伊弉冉尊は
高天原ではなく筑波山に住んでいたことになる。

④日本書紀(神代上)の記述に、「…そこで、一緒に日の神を生み申し上げた大日靈貴^注 (オオヒルメムチノカミ)という。わが子たちはたくさんいるが、まだこんなに怪しく不思議な子は いない。長くこの国に留めておくのは良くない。早く天に送り高天原の仕事をしてもらおう。 …」と。(注)大日靈貴とは天照大御神のことである。

- ⇒常陸風土記には、常陸國の鹿島神宮と香取神宮を中心とした地域を理想郷の高天原
を体現させる記事がある。

III. 天孫降臨の地、鹿児島

1. 猿田彦命の先導

- ①猿田彦命は、鹿島を出発しニニギ命の天孫降臨をヤチマタ(道が八つに別れ迷いやすい処)で待ち受け、岬の知識と航海技術を活用して先導した。
- そして、ニニギ命一行は鹿児島に上陸し居住する。それは、次の2点から想像できる。
- ・傘下に入ったタケミナカタ神を祭神とする諏訪神社(別名:南方神社)が鹿児島県の全神社の19%(110社)を占める。
 - ・鹿児島県姶良郡隼人町にある「天降川(あもりがわ)」は、船団が到着した地名と思われる。
- ②わずかに残る伊賀国風土記逸文によれば、猿田彦命は伊勢国に住み、伊賀国を合わせ20万年も統治したと記述する。

2. 鹿島と鹿児島

参資1-12

①鹿児島の由来

- * 延喜式神名帳に官幣大社と記載される霧島隼人町の「鹿児島神宮」の「鹿児島」の起源についての説明がされていない。
 - ・「神籠る島」がその由来とする説。つまり、高天原から来た人々が統治した場所。
 - ・「続日本紀」(797年)の中の養老7年(723年)の記事に「鹿島」の字が初出する。
- それ以前の文献では「鹿島」ではなく「香島(かぐしま)」と記述される。鹿児島と符合する。

参資1-13

②隼人と熊襲

- * 隼人は火照命(ホデリノミコト=海幸彦)を祖とすると書記は記述する。
- ・隼人とは、隼=ハヤブサのように早く飛ぶことができる人という意味です。
- ・連想されるのは「天の鳥船」です。
- ・隼人、熊襲も関東の高天原勢力の九州遠征でやってきた人々でしょう。

②隼人と熊襲(つづき)

* 鹿児島はシカの存在、熊は九州にはいない。

・熊のいる鹿島からのやってきた人々と結びついついても不思議ではない。

→古墳時代になると、隼人も熊襲も、また関東や九州も、見捨てられた居民、また辺境と見なされるようになる。

3. 景行天皇が命じた征討

* 熊襲征伐

ヤマトタケルの熊襲・隼人征伐は、日高見国の旧勢力になっている勢力の鎮撫であろう。

* 東征

・東国の平定：

日本書紀の記述では、「蝦夷を平らげられ、日高見国から帰り、常陸を経て甲斐国に至り、酒折宮(さかおりのみや)においてになった。」と記述する。

・この時、日高見国は東国的一部の国まで縮小していた。

・国譲りで列島を統一したのも日高見国、その後神武東征による古代大和の新体制に組み込む再統一の国家事業であった。